

書評

清水克行著

『耳鼻削ぎの日本史』

(洋泉社、二〇一五年)

室井 康成

一

洋の東西を問わず、人間の歴史意識の形成に大きな影響を与えてきたのは「講談的歴史語り」であろう。その多くは口頭伝承というかたちで次代へと伝えられ、また各地に伝播していった。日本の場合、中世の源平合戦や南北朝の戦乱は琵琶法師によって語られ、近世に入ると、同時代とそれ以前に起きた歴史的事件は、歌舞伎や講談といった種々の芸能の演目に取り入れられることで、人口に膾炙していった。徳川時代の後期に全国各地で作成された地誌や図会の類は、識字率が高まった当時であって、人びとの過

去に対する想像力を掻き立てる上で重要なツールとなったが、それとても、基本的には件の「講談的歴史語り」の世界観に拘束されていた、と私は思う。

その際、人びとが「歴史」に対するイメージを具体化させるのに欠かせないのが、当該の歴史的事案と関連する遺跡であろう。固有の出来事・場所と不可分であり、かつ目で見て確認することが可能な遺跡という存在は、人をして現在が過去と連続していることを実感せしめるパワーを発揮するといえよう。しかし、それらをめぐる由緒の多くは「口伝」として語り伝えられてきたものであり、もとより史料の裏付けのとれないケースが少なくない。ゆえに、それらは学問としての歴史学の対象とはなりにくかったが、本書は、そうした伝承世界にあえて分け入り、歴史学的な眼差しを向けた冒険的意欲作である。

著者は、日本中世の社会史を専門領域とし、なかんずく室町足利時代の法慣習を軸に、公権力と民衆との関係性の解明を主たるテーマに据えてきた歴史学者であるが、これまで文献資料と向き合う傍ら、各地に散在する遺跡へと足を運び、その土地の人びとから由来譚などを尋ねてまわったという。その過程で、「耳塚」や「鼻塚」などと呼称され、昔日の合戦で命を落した将兵の耳や鼻を埋葬したと伝えられる塚状の遺跡と出会う。

すでに著者は、大冊『室町社会の騷擾と秩序』『清水二〇〇二』において、日本では中世期までに、人間の耳や鼻を削ぐという行為がみられることを明らかにしている。その著者が、各地のいわく言われのある「耳塚」「鼻塚」と遭遇した際、それらが往時の「耳鼻削ぎ」の物的痕跡であると考へたくなるのは、ごく自然であろう。しかし、そうした塚をめぐる歴史の多くは、例の「講談的歴史語り」によって伝えられ、また彩られてきたものであろうから、これを歴史的に検証することは困難を極める。本書の魅力の一つは、言わば「伝承」が醸し出すえもいわれぬ求心力に、歴史学者の良心をもって必死に抗おうとする著者の姿が曝け出されていることである。そうした知的格闘の中から見出されたものは、いったい何なのか。以下、少しく本書を覗いてみたい。

二

まず本書は、著者が長野県松本市にある「百瀬の耳塚」を訪れた時のエピソードから筆が起される。この塚に関するしても、戦国時代の合戦にまつわる伝承があるが、ここでは他の類例において語られがちな戦死者の怨霊譚は聞かれず、むしろ塚には耳の疾患の治癒に霊験があると信じられ、

周辺の住民は塚の存在を誇りにさえしているという。そこで著者の思考は、大正期に柳田国男と南方熊楠との間で行なわれた「耳塚」論争へとフールドバックする。片や日本民俗学の父と呼ばれ、片や当代随一の博覧強記と称された知の巨人どうしによる論争は、ずばり「耳塚」「鼻塚」の真贋をめぐる交わされたものだった。

ここで柳田は、これらの塚を、往時の戦争で行なわれた「耳鼻削ぎ」と結びつけることを否定する一方、南方は様々な史料を挙げながら、そうした風習が中世期に存在したことを指摘し、この論争は決着を見ないまま、両者の絶交によって幕切れとなる。すでに前著において「耳鼻削ぎ」の存在を論証している著者は、当然のことながら南方説に寄り添うことになるが、全国に残る「耳塚」「鼻塚」が、即「耳鼻削ぎ」の痕跡であるとの結論は下さない。はたして件の「伝承」は真実を語っているのだろうか。ここから本書の筆致は、「耳鼻削ぎ」を通して見た、言わば「日本精神史」の様相を呈してゆく。

第一章「ミミヤキリ、ハナヲソギ」は残酷か?」では、中世期の文献資料に記されたあとう限りの「耳鼻削ぎ」の事例が示され、それが同時期においては地域・世代・身分を問わず「女性」に対して慣習的に行なわれてきた刑罰であったことが明らかにされる。これにより、権力者による

苛烈な統制下に置かれた「みじめな民衆」像を描いた史料としてしばしば引用される、紀伊国「阿弓河莊百姓申状」に見られる有名な「耳鼻削ぎ」が、権力者（地頭）が民衆に対して一方的に加えた蛮行であったわけではなく、当時広く行なわれていた刑罰慣行の一事例であったという見方が示される。

それにしても、他者の目に触れやすい顔面の部位を削ぎ落とすという行為には、何らかの象徴的な意味合いが込められていたはずである。第二章「耳なし芳一」は、なぜ耳を失ったのか?」では、それこそ「講談的歴史語り」に彩られた古今の文学作品における「耳鼻削ぎ」の事例が丹念に分析され、それが女性を殺すことを忌む観念から生まれた宥免刑であった蓋然性が示される。要するに、男では死刑を免れないような罪科であっても、当人が女性である場合は「耳鼻削ぎ」という代替刑が適用されたというわけだ。このことから、著者は「耳鼻削ぎ」を、当時の感覚に照らせば女性に対する温情、つまり「やさしさ」が表出したものであったと指摘する。

しかし、耳や鼻を失うという「異形」の様態は、時代を追うごとに「非人」の身分への転落を示す記号と化していったようだ。だから「耳鼻削ぎ」が死刑からの罪一等を減じた温情措置であったとしても、「彼女たちのその後の人生

は決して安穩なものではなかっただろう」と著者は想像する。そのためか、実際に鼻を失った女性が見ず知らずの児童を拉致してその鼻を削ぎ、それを自分の顔面に貼り付けるという猟奇的な事件が、戦国時代に突入直後の応仁二年（一四六八）に京都郊外で発生している。

三

以上のように、「耳鼻削ぎ」は中世期に確立した刑罰の一つであり、一部の例外を除いて、その対象のほとんどは女性であった。また本書において例示された史料の数からしても、これが頻繁に行なわれていた珍しからざる刑罰であったとも思えない。しかし、そうした事例が頻出し始めるのは、耳や鼻が「首級」を代替する戦功証明書として見做されるようになってからである。第三章「戦場の耳鼻削ぎの真実」では、それが全国各地で大量の戦死者を生み出した戦国時代の副産物であったことが明らかにされる。

著者によると、女性に対する刑罰という意味ではなく、戦場で敵軍將兵に対して「耳鼻削ぎ」が行なわれた痕跡は、「藤原純友の乱」や「前九年の役」など平安時代に起きた戦乱においては見られるものの、鎌倉・室町前期では確認できなくなるといふ。この変化について、著者はこの

ように考える。つまり、鎌倉時代になると武士の間で残酷な殺傷行為を忌む規範意識が形成されたため、「耳鼻削ぎ」のような蛮行が終息した、と。しかし、本書で挙げられた史料をみると、それは「応仁の乱」を契機に復活したようである。いや、平安時代の「耳鼻削ぎ」の事例が、説話や軍記物といった二次的史料でしかみられないことを考えると、それが当該の時代に本当に行なわれていたと理解するのは早計であろう。私は、それまであくまでも慣習的刑罰であった「耳鼻削ぎ」が、戦国時代に入り、はじめて戦場でも行なわれるようになったのだと捉えたい。

いずれにせよ、第三章では、戦場での「耳鼻削ぎ」の事例が広範にわたり分析されているが、注目すべきは、そこで「耳鼻削ぎ」に遭う人物が「大将」以下の将兵に限られていたことである。無論、大将クラスを仕留めた場合は、首を以ってその証とされたわけだから、ここへ来て耳や鼻は、下級将兵の記号と化したのである。贅言するまでもなく、そこには兵士の大量徴発・動員が可能になったことや、火器の発達などにより大量の戦死者が生じるようになったという時代相が反映しているといえよう。

圧巻は、何と言っても「文祿・慶長の役」の折に、豊臣秀吉の入念な指示のもとに行なわれた朝鮮での「耳鼻削ぎ」であろう。正確にはわかっていないが、この時、数方にも

のぼる朝鮮人の耳や鼻が削ぎ落とされ、日本にいる秀吉のもとへと送られたのである。しかも将兵のみならず、民間人の女性や子どもまでが、この日本発の蛮行の被害に遭遇したというのだから、言葉を失う。これについて著者は、「戦略的にみても、真剣に朝鮮半島を征服して、その地の人民を永続的に支配しようと考えらば、その彼らに対して耳鼻削ぎを行なうというのは明らかに逆効果である。むしろ朝鮮民族に憎悪と敵意を植えつけ、敵側に走らせる軽率な行為だったといわざるをえない」との見解を披瀝している。卓見であろう。そうすると「文祿・慶長の役」は、通説のごとく秀吉による大陸支配にその目的があったのか、勘練りたくなる。かつて藤木久志が指摘したように、それは「天下統一」にともない、日本国内から戦争がなくなつたことにより鬱積したフラストレーションを国外へと振り向けようとしたものか「藤木 二〇〇五」、あるいは毫碌した秀吉による、単なる「思い付き」の所業であったのではないかと。

四

「耳鼻削ぎ」は、戦国時代が終わり、徳川時代に入って過去の遺物となったわけではなかった。罪人に対して苦痛

と恥辱を与える肉刑として、むしろ各藩で継続され、より一般化したという。しかし時代が下がるにつれ、一七世紀末の元禄年間には、五代将軍・徳川綱吉の発した「生類憐みの令」の影響などもあり、ほぼ全国的に「耳鼻削ぎ」のような残酷刑は廃止される。この近世期の刑罰観の変遷を跡付けたのが第四章「未開」の国から、「文明」の国へである。タイトルからも察せられるように、こうした嚴罰主義から寛刑主義への変化を、著者は「未開」から「文明」への移行とみる。それゆえにこそ、著者は幕末の新選組が行なった敵対者に対する「耳鼻削ぎ」を、時代に逆行したアナクロニズムだと評価する。世の「新選組ファン」にとっては耳の痛い話に違いないが、これが新選組という組織の「本質」であり、その末路の隠喩であったと捉えるべきであらう。

ここまで、本書は「耳鼻削ぎ」をめぐる歴史をたどってきたが、議論は著者の「初発の問題意識」といってよい「耳塚」「鼻塚」へと回帰する。第五章「耳塚・鼻塚の謎」では、著者の管見に入った一九の類例について、個々の伝承が史実を反映しているか否かといった視点により分析が行なわれている。その結果、件の「文禄・慶長の役」での朝鮮人将兵・人民の鼻が埋葬された京都・方広寺の「耳塚」以外は、伝承を史実とみなす史料裏付けはないことが明らかにさ

れる。つまり、墳丘が対に並んで「耳」のように見えることから、それが近在で実際に起こった前近代の戦いの記憶と結びつけられ、いつしか戦死者の「耳」を埋葬したとする伝承が形成されたというわけである。してみると、前述の柳田国男と南方熊楠との論争は、言うまでもなく柳田説に軍配が上がることになる。だが、この真贋論争に決着をつけたからといって、著者は「耳塚」「鼻塚」の伝説が歴史的に無価値であるとは断言しない。それらの語りには、日本社会が「未開」から「文明」へと移行する中で消えていった「耳鼻削ぎ」の記憶の「残滓」が看取できると考えるからだ。

終章「世界史の中の耳鼻削ぎ」は、二〇一〇年にアフガニスタンにおいて、イスラム原理主義を奉じる「タリバーン」の兵士によって鼻を削がれた女性の話から説き起こされ、本書で論じてきた「耳鼻削ぎ」が、けっして過去の日本という限定的な時空間で行なわれていた遺物ではないことが、種々の事例をもって主張される。本章は、「耳鼻削ぎ」という慣習の消滅が「未開」から「文明」への移行の結果とみた著者の、それこそ「やさしさ」に満ちた、一書の締めくくりに対応しい筆致となっている。ここまで読み進め、私たちが「耳鼻削ぎ」を文字通り「蛮行」と捉えることができるのは、私たちが「文明」の社会に生きている

清水克行著『耳鼻削ぎの日本史』（室井）

からであるという「事実」と、歴史過程の中で「未開」の彼岸へと追いやられたはずの「蛮行」が、今なお世界のどこかで公然と行なわれているという「事実」を改めて教えられ、慄然とした。

「講談的歴史語り」は、私たちにとって身近で親しみやすいものである。これを相対化して事実関係を検証し、さらに世界的な視野から一般化を試みることは、歴史に向きあう学問の醍醐味といえよう。本書は一般向けに書かれたものだが、初学者のみならず、プロパーの研究者にとっても、学問の原点に立ち返らせてくれる貴重な一冊である。本書が一人でも多くの人の披見に供されることを願いつつ、筆を擱く。

《参考文献》

清水克行 二〇〇二『室町社会の騷擾と秩序』 吉川弘文館。

藤木久志 二〇〇五『新版・雑兵たちの戦場―中世の傭兵と奴隷狩り』 朝日新聞社。

（本学兼任講師）